

## 銜学ごっこ

—『人麻呂の暗号』を読んで—

佐藤 進

『人麻呂の暗号』（新潮社）がよく売れているときく。トリリングな手法で『万葉集』の上代語を解き明かした画期的な内容であるというから、私のように歴史言語学を研究するものにとっては気になる本である。

それでひとわり読んで見たものの、やはりどうにもならない代物のようであった。人麻呂の歌の中に古代中国語や朝鮮語がひそかに組み入れられていたのではないか、というような発想はともかく、肝心の言葉の吟味については納得できなかった。

たとえば枕詞の「あしひきの」の分析である。「あし」の表記が「足」になっていることに着目して、

朝鮮語 dari/dari（古語）/dar（古語「達」）

日本語 足／引・曳／山

という「タリ」の語呂合わせになっているという（原書はハングル表記、本稿ではローマ字転写にした）。これが『人麻呂の暗号』の基本的な方法である。

ここには、現代朝鮮語、朝鮮古語（いつの時代か不明）、朝鮮漢字音というまったく性格の異なる単語が同一平面にならべられている。漢字語も朝鮮固有語もほとんど区別せずに論ずる。こうしたやり方は、少しでも歴史的言語学を学んだ者ならまず戒めるべきものであるはずだ。

古代中国語はどんな具合に利用されているかというと、要するに字源にもとづいて連想をたくましくする材料になる。「東」という文字からは、「突き抜ける」という語感を下敷きにし、なおかつ dong という朝鮮語音から「終末」というモチーフが導きだせるという。「ひがしのかざろい」

がなぜ終末なのか、彼女たちは現地安騎野に行って、荘厳な日の出を経験してくる。そこでこの日の出こそが朝と夜の境、すなわち「生死の境」なのだという結論を得る。

しかし私見によれば、古代人が東という文字によって終末を暗示するとはまったく考えにくい。東が「通」に通じ、突き抜けるという語感をもつというのは、ごく最近の発想である。

東は「木立を通して朝日がみえる」というのが古代人の文字感覚であり、五行思想で季節に配当すれば「春」、つまり終末とは反対の、若々しいものごとの始まりでなくてはならない。東が終末のモチーフであるならば、「東宮」などという語が形成されるわけはなからう。

一度思い込んだらほかのことが一切見えなくなってしまっている。著者たちが21歳の若い女性であるからなどとは言いたくないが、はしゃぎ過ぎが随所にある。

たとえば「看=カン」と「観=クワン」の区別について、「旧かなづかいは韓国語音だった」などと言うにいたってはどうしても恐れ入ってしまう。朝鮮語がまだ漢字音の開口と合口を区別しているからといって、これをただちに旧かなづかいの源流のようにいうのは無邪気を通りこしているのではないか。

ただし、この本を学生諸君に読むなど言うつもりはない。私だって中学生のころ、レプチャ語で解釈した安田徳太郎の『万葉集の謎』を感激して読んでいた。それが今日、歴史言語学を研究する遠因になっていないとも言いきれないからである。

あとで批判力がつくように勉強すればいい。